

称号及び氏名	博士（人間科学）	金 花 芬
学位授与の日付	平成28年3月31日	
論 文 名	日本における中国朝鮮族の生活現状に関する研究 —大阪におけるコミュニティの形成と継承を中心に	
論文審査委員	主 査	酒井 隆史
	副 査	細見 和之
	副 査	田間 泰子

要旨

朝鮮族は中国政府が公認している55の少数民族の一つで、多くの人は朝鮮半島にルーツを持っている。かれらは主に中国の東北三省（黒龍江省・吉林省・遼寧省）に移住して稲作をはじめとする農耕生活を送ってきた。しかし1978年の改革開放政策後、多数の朝鮮族が中国国内外に移動しはじめ、1990年代に入るとその流れはさらに加速した。その移動先の一つが日本である。日本において外国人に関する様々な統計データは、基本的に国家別に分類されて作られており、朝鮮族は「中国人」として集計されている。このことは一方では、自分自身が朝鮮族であることを表明しない限りお互いにその存在がわからないということであり、他方では日本人のみならず他の在日外国人にも「朝鮮族」という存在が知られないことを意味している。このような状況のなかで、いったいかれらはどのように日々の生活を営み、お互いにつながりあい、子どもを教育しようとしているのか。本研究ではこの3つの問題をとおして、日本で暮らす朝鮮族の生活の現状と、子ども世代をめぐる状況および予測される問題点を明らかにすることを目的とするものである。

本論は、序章と終章および5章から成る。

序章ではまず、先に述べた3つの問題に関わる先行研究を検討し、本研究がヴァーチャル空間をも含めた朝鮮族コミュニティのなかで、これらの問題の考察を目的とするものであることを示した。

第1章では、「朝鮮族」の起源から来日までの経緯を歴史的に概観した。第1節では、朝鮮族の祖先となる朝鮮人が、どのような歴史的背景のもとで朝鮮半島から現在の中国の東北部に移住したかについて述べた。第2節では、改革開放政策以後、中国人全体が激しく国内外を移動しはじめたことを指摘した上で、日本の入国管理局の統計資料や朝鮮族の移動に関する先行研究を参照し、朝鮮族が来日するまでの社会的背景について語った。

第2章では、筆者が大阪中心の関西地域でおこなった質問紙調査をとおして収集したデータを整理し、朝鮮族の来日の実態と、朝鮮語・中国語・日本語に対するかれらの習得の程度や使用状況をまとめた。第1節では、調査概要を説明した。第2節では、来日時および来日後の生活状況や、かれら自身の今後の予定について、調査項目ごとに分類した。第3節では、かれらが中国や日本の学校で、日本に居住する朝鮮族のアイデンティティの核心

にあるものと考えられている 3 言語（朝鮮語・中国語・日本語）をそれぞれどのように習得し、場面によってどのように使い分けているのか、さらに調査対象者自身がそれぞれの言語をどの程度まで習得していると考えているのかについて調査結果をまとめた。

第 3 章では、ヴァーチャル空間における朝鮮族コミュニティに焦点を移し、日本在住の朝鮮族と関わりが深いポータルサイト「シムト」の「日本体験手記」掲示板（この掲示板は 2002 年にシムトが開設された当初からある、もっとも歴史の長いコンテンツである）に投稿された体験手記の分析をとおして、朝鮮族個々人の日本生活の現状を明らかにするとともに、ヴァーチャル・コミュニティとしての「日本体験手記」掲示板の役割について論じた。第 1 節では、シムトの歴史や「日本体験手記」掲示板について述べ、分析対象となるデータの抽出方法を説明した。これをもとに、第 2 節では体験に関わる手記を在留資格別に分類し、掲示板に書き込まれた文章を具体的に紹介した。第 3 節では、体験から感じたことに焦点をあててテーマ別に分類し、文章を具体的に紹介した。第 4 節では、これらの手記から垣間見られる朝鮮族個々人の生活状況を浮き彫りにし、「日本体験手記」掲示板の役割についても述べた。

その結果、掲示板の語りから、未来志向で戦略を立てて生きようとする朝鮮族の明るい生活の現状が明らかになったものの、それ以上に慣れない日本での暮らしのなかで意思疎通がうまくいかなかったり、勉強よりもアルバイトに明け暮れて精神的にも肉体的にも疲弊したり、1 人で寂しくて悲しい思いをしたことや、挫折など、苦しい生活を送っている／いた状況が明らかになった。しかし掲示板でこのような体験や記憶を語り合うプロセスをとおして、かれらが仲間意識や共通の価値観をはぐくみ、それがヴァーチャル空間における朝鮮族コミュニティの形成につながっていることも示すことができた。

第 4 章では、東京に次いで朝鮮族が多く暮らしている地域である大阪において、朝鮮族コミュニティと言えるものがあるのか、あるとすればそれはどこにどのように形成されているのかについて論じた。第 1 節では、東京と同様に、大阪へも、朝鮮族はまず留学生としてやって来たこととコミュニティの土台となる人間関係について述べ、本章で用いるデータの収集方法を説明した。第 2 節では、大阪で見られる朝鮮族の自発的な集団活動を整理した上で、それらの活動から組織化した団体と、自発的な活動の事例として企画・運営された運動会を取りあげた。第 3 節では、大阪のある韓国系キリスト教会で活動する朝鮮族信徒を取りあげ、宗教コミュニティ内におけるかれらの活動状況や役割について述べた。第 4 節では、朝鮮族が経営する料理店のうち、朝鮮族料理を提供しかつ羊肉串焼きを看板メニューに掲げている羊肉串店を取りあげ、日本における朝鮮族料理店の位置づけと、それが大阪で朝鮮族がコミュニティを形成する上で重要な〈場〉となっていることを示した。そして章の最後では、大阪における朝鮮族コミュニティの現状と、それに対する朝鮮族個々人の意識について論じた。大阪でも朝鮮族の定着が進むなか、ゆっくりとしたスピードではあるが、ヴァーチャル・コミュニティとも関わりながら朝鮮族のコミュニティは多様に形成され、展開されている。しかし恒常的なコミュニティは現在もなおほとんど見られず、それを作って維持しようとする動きも皆無といってよい。その理由として、留学生活や仕事に追われて余裕がない人々が精力を尽くして長い期間にわたってコミュニティを維持していくのは困難であることと、大阪ではすでに猪飼野とミナミにコリアンと華人のコミュニティが形成されている環境で緩やかなコミュニティを支えているのはパーソナル・ネットワークであるが、このようなパーソナル・ネットワークに慣れた朝鮮族は、組織化された団体の必要性を感じにくいという結果が見られた。

これを受けて第 5 章では、主に大阪に居住する朝鮮族のうち、子どもを産み育てている

者が、子どもへの教育や言語の問題について、どのように考えているのかを、家庭内で用いる言語と学校選択という 2 つに焦点をあてて論じた。まず第 1 節では、調査の概要と調査対象者の属性を整理した。第 2 節では、家庭内で使用する言語について、調査対象者の両親との間で使用する言語・配偶者との間で使用する言語・子どもとの間で使用する言語に分類して整理した。そして調査対象者が日本生まれの子どもたちに朝鮮語・中国語・日本語をどのように習得させようとしているかについて、それぞれ具体的な事例をあげて述べた。その結果、調査対象者が生まれ育った家庭環境のなかで用いてきた主要言語は朝鮮語であり、中国語だけを用いた者はいなかったことを指摘し、これにより家庭が、朝鮮語を身につけるもっとも重要な〈場〉となっていることを示した。そしてそのような環境で育った朝鮮族は、やはり日本で暮らしていても、家庭内で朝鮮語を様々な形で子どもに習得させようとし、その試みは幼児期まではある程度まで成功していると言える。しかし、子どもが保育園などに通いはじめると、この言語環境は急速に崩壊し、子どもが成長するにつれて家庭内で用いる言語における日本語の比率が大きくなり、朝鮮語を用いなくなった親もいることが明らかになった。第 3 節ではまず、調査対象者が中国と日本の学校でどのような言語教育を受けたのかを整理し、かれらが自分たちの子どもをどの学校に入学させるか／させようと考えているかに関して考察した。調査対象者となった朝鮮族は、初等教育・中等教育において中国の朝鮮族学校に通った者が多く、漢族学校に通ったものは少なかった。しかし、子どもの学校を選択する上では、かれらは子どもをコリア学校ではなく日本の公立学校や中華学校などに通わせているという結果が出たことを示した。そして第 4 節では、以上の調査結果を受けて、親となった朝鮮族には、子どもに朝鮮語ないし朝鮮族文化をそのまま引き継がせることよりも、ホスト社会に適合した新たなコミュニティの創出に力を注ぐ傾向が見られることを指摘した。そしてこのような調査結果が出てきた社会的背景として、日本社会における外国人への偏見や差別、そこから避けるための自らのグローバル社会を視野に入れたときに浮かびあがってくる言語の優先順位、それに伴うエスニック・スクールの諸問題が関わっていることについて述べた。

終章では、第 2 章から第 5 章で整理・分析した生活現状を、個々人の日本生活・コミュニティの形成・次世代教育の 3 点に分けてそれぞれ論点と調査結果をまとめ、大阪における朝鮮族コミュニティの姿がどのように変わっていくのかという課題について、明確なコミュニティがないまま、日本社会のなかで育っていく朝鮮族の子どもたちにとって、「朝鮮族」という根（뿌리）がどういう意味をもつのかによって決まるのではないかと問題提起した。

学位論文審査結果の要旨

(1) 研究テーマが絞り込まれている

本論文は、日本における中国朝鮮族移住者たちの生活現状について、コミュニティという視点を設定し、さらにそれを空間と時間という二つの軸をもって論じている。すなわち、仮想的コミュニティ、現実の地域コミュニティ、そして言語、教育をとおしたコミュニティの世代間継承という論点を設定して、一貫して論じている。したがって、本論文の研究テーマは、在日本中国朝鮮族の生活現状の解明に絞り込まれている。

(2) 論文の方法論が明確である

本論文は、文献や公表された統計というかたちで実態のつかみにくい在日本中国朝鮮族について、そのこれまでの研究蓄積のフォローをはじめとして適宜文献をおさえながらも、基本的にはインタビュー調査、参与観察、ウェブ上のデータ収集といった手法によって接近するものである。いずれにおいても、本研究における方法論は明確である。なお、本論文は、全体にわたって本研究科人間科学専攻における研究倫理審査委員会による審査を経ている。

(3) 研究テーマについての先行研究の調査を十分に行っている

本論文においては、とくに第一章において、先行研究についての追尾と検討がおこなわれている。在日本朝鮮族についての先行研究は決して多いとはいえないが、それらの研究について、第一章では、1) 個々人の生活実態、2) 社会集団としての「在日本中国朝鮮族」、3) 次世代教育、の三つに分類して調査がなされている。それらの検討をふまえ、1) については、個々人の経験の積み重ねにおける「内面」の変容など踏み込んだ研究がすくないこと、2) については、東京にフィールドが集中しており、もうひとつの在日本朝鮮族の集住地帯である大阪については不足していること、3) については世代的継承については、継承性への積極性は証明されてきたが、親世代の言語レベル、教育戦略、日本における支配的言語環境との折衝についてはあまり論じられていないと指摘されている。コミュニティについての基礎文献について若干の研究蓄積のサーヴェイの不足もあるが、総じて、先行研究の調査については十分なレベルに達していると判断できる。

(4) 研究の素材となる基本文献、資料、調査データを十分に吟味している

朝鮮族の歴史について、在日本朝鮮族についての先行研究についての文献、あるいは言語継承、教育戦略といったテーマについての基本文献に十分に目を通し、また、ウェブ上のデータについては、収集された大量のデータをその主題ごとに系統的に整理し、こまやかな読み込みをおこなっている。また、インタビュー、参与観察などのフィールドワークからえられたデータについても、十分な配慮のもとで検討をくわえ、用いられている。

(5) 研究テーマについて、先行研究にはない新しい知見を打ち出している

本論文の先行研究にない新しい知見としては、まず、ウェブにおける在日本朝鮮族

サイトの掲示板の書き込みを大量に収集し読み解くことで、移住者たちの経験とそれともなう意識や感情、その変容にせまった点にある。つぎに、大阪をフィールドとしているという点があげられる。在日本朝鮮族についての研究はこれまで主に東京にフィールドがおかれていた。本研究は、フィールドを大阪におくことにより、ただ拠点を地理的に変えたというだけではなく、大阪で独自の歴史をもつ在日韓国朝鮮人コミュニティ、中国人コミュニティなど他のエスニック・マイノリティとの関係性のなかで捉えるという視点がえられた。さらに、朝鮮族の大阪におけるコミュニティ形成の努力を現場においてつぶさに観察するとともに、世代間の言語継承にまつわる調査をへるなかで、在日本朝鮮族の独特の存在性、すなわち、アイデンティティの多元性と柔軟性、それであるがゆえの複数集団を媒介する役割、そして、コミュニティ形成の困難といったことがらが浮き彫りになった。これらは、いずれも先行研究にはないあたらしい知見である。

(6) その知見を裏付けるための、必要にして十分な議論と実証が展開されている

ウェブにおける在日本朝鮮族サイトの掲示板の書き込みを大量に収集して、系統的な整理とこまやかな読解をおこない、移民たちの経験とそのうつりかわりを説得力あるかたちで提示している。大阪におけるコミュニティ形成については、熱意のある10年にわたるフィールドワークのみならず、みずからもコミュニティの成員であるという位置から、きわめて具体性のある議論をおこなっている。さらに、世代間言語継承についても、時間幅をもっておなじ対象に複数の調査をおこなうことで、検証内容に重みがあたえられ、その変容をふくめた実態について裏づけあるかたちで実証されている。仮想的コミュニティと現実のコミュニティの関連についてもうすこし追求があってもよかったが、総じて議論と実証の展開については必要にして十分である。

(7) 当該分野の研究領域に新たな地平を切り開く、独創性を備えた論文である

本論文は、在日本朝鮮族について、中国人をカテゴリーとする移民調査の統計では埋もれてしまうその複雑な地位ゆえに、公表された統計などでの実態がふまえにくいということ、そして先行研究も乏しいなかで、複数の調査方法を駆使し、現場への参加と時間幅をもった調査によって、その主題である生活実態に可能なかぎりせまっている。しかも、それを先行研究のない大阪という地域においておこなったという点において、あたらしい領域を開拓したものである。さらに、そのような調査をとおして、在日本中国朝鮮族の独特のありよう、すなわち、東アジアの歴史のなかで複雑な歴史と移動の経緯をもつエスニック・マイノリティの独自の存在性をあきらかにしている。これらの点において、本論文は十分な独創性をそなえたものである。

以上の評価をふまえ、本学位論文審査委員会は全員が一致して、本論文を博士（人間科学）学位の授与に値するものと判断した。

以上